

House C — 地層の家

設計: NAP建築設計事務所

地層の家

中村拓志 | Hiroshi Nakamura

敷地は、海と山に挟まれた場所にあり、周囲にはヨットが行き交う水平線、浜辺、地層の美しい崖、野の花が揺れる草原が広がっている。

都心の高層マンションに住んでいる建主は、週末に自然と触れ合い、土いじりをしながら生活したいと考えていた。家族3人の要望は、恵まれた環境を満喫できること、地震の時に揺れないRC造、海側にはウッドデッキのテラス、大きなワンルームで生活できることだった。

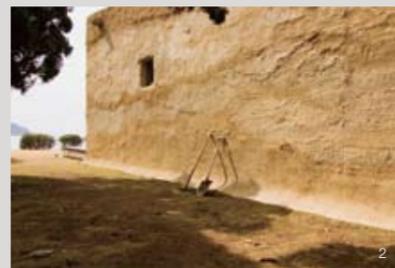
そこで、せっかくの環境が海側と山側に分断されたり、連続性が失われることのないよう、両隣の家からの視線を遮断しつつ、山側から海側まで視線も風も通り抜けるワンルームとした。構造は建主の要望どおりRC造とし、屋根は外断熱を施した上に、保護材兼仕上げ材として現場の土を使用し、流出防止のために野草の種をまいた。そうすれば、屋根材で被覆する必要がないためコストを抑えることができ、移動コストの少ない建材で建設できるため、環境への負荷も少ない。外壁は海岸部特有の塩害防止のため、コンクリートにコーティングする必要がある。そこで屋根と同じように土を採用し、珪藻土とセメント、樹脂などを混ぜて最大55mmに

厚塗りした。仕上げは住み手も一緒に参加し、木ゴテ、金串、金箒(かねぼうき)、ヘラなどで土を掻き落とした。あらかじめ土の中には砂利や貝を混ぜておいたために、掘るたびに何かが出てきて、発掘作業に似た楽しみがあった。その結果、左官の工程上の時間差や掻き落とした痕跡、土の中の内容物が表出し、大地から地層が隆起したような外観となった。

この建物のフォーム、テクスチャー、カラーの決定権は、住人や職人の手と、気候や大地などの自然にあった。外形やテクスチャーは、土を掻き落とす住人や施工者たちの工具にかかる力と土の固さに呼応する。壁の色は、現場の土と各種材料の混合具合による。屋根の輪郭や色もまた、土が育む植物が決める。そして竣工後も、住人の手による剪定、風や鳥たちが運んでくる種子や風化、季節に応じて変化し続けるだろう。その変遷が、唯一無二の家の歴史を刻んでいく。

住人は週末になるとここを訪れて、庭で土をいじり、畑を耕し、壁や屋根を見つめ、触れる。暮らすほどに心と体が大地に馴染んでいく。土と生活の新しい関係が始まった。

LDKには長さ5.5mのキッチン兼ダイニングテーブルを設けた。そのキッチンが厨房機器として目立ってしまうのではなく、インテリアに馴染む家具としてデザインしたいと考えた。丸パイプを曲げたようなシンプルなINAXのキッチン水栓は、そのイメージにぴったり合うものだった。



なかむら・ひろし — 建築家・NAP建築設計事務所代表取締役 / 1974年生まれ。1999年、明治大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。1999-2002年、隈研吾建築都市設計事務所。2002年、NAP建築設計事務所設立。

主な作品: Lanvin boutique Ginza[2004]、House SH[2005]、lotus beauty salon[2006]、Dancing trees, Singing birds[2007]など。

1 — ウッドデッキから室内を見る | 2 — 現場の土を使った外壁 | 3 — 屋根から海側を見る | 4 — 北面全景
[写真4点とも: NAP建築設計事務所]

